

シュヴァイツァーにおける終末論的思惟と 倫理の関係性について

岩井 謙太郎

(和文要旨)

本稿においては、アルベルト・シュヴァイツァー (Albert Schweitzer, 1875-1965) が構築した「生への畏敬」(Ehrfurcht vor dem Leben) の倫理と終末論的思惟の関係性について考察する。具体的には、一章では、『終末論的信仰の非終末論的信仰の再編のプロセスにおける神の国の理念』(*Die Idee des Reiches Gottes im Verlaufe der Umbildung des eschatologischen Glaubens in den uneschatologischen*) を基に、古代から中世において、キリスト教の神の国観が、どのように歴史的に展開したのかについて検討する。その際、神の国観と結びついた終末論的思惟が、人間の世界に対する態度と密接に関連していることを、とりわけ、ヨーロッパにおける現世に対する否定的態度が神の国の遅延の問題と関連していることを考察する。次いで、二章では、広義の近代ヨーロッパにおいて、終末論的思惟を媒介して、現世否定の態度から現世肯定への態度への転換がどのように生じたのかについて検討する。その際、シュヴァイツァー自身の終末論的思惟の視点を論評するために、黙示文学的終末論的要素におけるプラス的契機とマイナス的契機についても考察する。最後に、三章においては、シュヴァイツァーの遺稿『世界の諸宗教における文化と倫理』(*Kultur und Ethik in den Weltreligionen*) におけるイエスの倫理と、「生への畏敬」の倫理がどのように関連しているのかについて検討する。そして、イエスの倫理と密接に関連した「生への畏敬」の倫理が、黙示文学的終末論的思惟に対して、どのように反映されているのかについて論じ、「生への畏敬」の倫理の現代的意義について考察を行う。

(SUMMARY)

This paper examines the connection between Schweitzer's Ethics of Reverence for Life and his eschatology. The first chapter looks at the historical development of the idea of the Kingdom

of God from antiquity through the Middle Ages by utilizing the basic notion of God's Kingdom as the concept emerging out of the process of restructuring non-eschatological faith through eschatological faith. This hybrid eschatology in which the end of time is merged with the establishment of God's kingdom demonstrates a consciousness of and concern with human society. This is especially true of European society with its largely negative attitude toward this world as a result of the delay of God's kingdom. Chapter two looks at the factors involved in the transition in modern Europe from its generally pessimistic worldview to an affirmative one through the mediation of eschatological thought. In order to evaluate Schweitzer's own eschatological position, it is necessary to consider the positive and negative among the eschatological elements of the revelatory literature. Chapter three examines the connection between Jesus' ethics as portrayed in Schweitzer's unpublished work *Culture and Ethic in the World Religions* and the Ethics of Reverence for Life. Finally, reflections of the above ethics in the revelatory eschatological literature will be discussed and implications for Schweitzer's Ethics of Reverence for Life in the contemporary world will be considered.

はじめに

本論においては、アルベルト・シュヴァイツァー (Albert Schweitzer, 1875-1965) において、思想的に構成されたキリスト教の終末論的歴史観が、「生への畏敬」(Ehrfurcht vor dem Leben) の倫理と、どのように関連しているのかについて考察する。それを解明するために、まず、一章で、『終末論的信仰の非終末論的信仰の再編のプロセスにおける神の国の理念』(*Die Idee des Reiches Gottes im Verlaufe der Umbildung des eschatologischen Glaubens in den uneschatologischen*) を主なテキストとして、シュヴァイツァーが考察する終末論的視座(神の国観)を概観する。その際、古代から中世に至る終末の遅延の問題(終末論的思惟)との関連から、現世に対する否定的な態度(現実社会を変革することに消極的な態度)が生じたことを併せて検討する。

次いで、二章では、広義の近代ヨーロッパにおいて、終末論的思惟を媒介することで、現世に対する否定の態度が、どのように現世に対する肯定への態度へと転換しえたかについて考察する。その際、シュヴァイツァーが有意味な倫理を構築する際に有効であると考え、終末論的視点とはいかなるものであるのかについても明確化し、黙示文学的

終末論的要素のプラス的要素とマイナス的要素についても検討する。最後に、三章においてシュヴァイツァーの遺稿『世界の諸宗教における文化と倫理』(*Kultur und Ethik in den Weltreligionen*) から、既刊著作では十分展開されていなかったイエスの倫理について検討する。それを通じて、終末論的思惟(キリスト教的思惟)と生への畏敬の倫理との連関について明らかにしたい¹。

一章 神の国観の基本的視座

シュヴァイツァーは『神の国の理念』において、イエスが初期ユダヤ教²の黙示文学的終末論の枠組みにおいて思惟し行為したことを前提に議論を展開する³。すなわち、彼は、黙示文学的終末論的イエス像(この世界の終末と、それに続く、超自然的な神の国の切迫した到来を待望した)から、古代原始キリスト教から現代に至るまでのキリスト教の歴史哲学を、終末論的視座において精神的に考察するのである。このシュヴァイツァーの見解については、知恵思想におけるイエス像等、現代の聖書学において様々な批判がなされているが、一定程度承認されてことも付言しておきたい。そこで、近現

¹ 本拙論においては、以下のシュヴァイツァーの文献を用いるが、引用の際にはカッコ内の略号を記す。邦語の翻訳があるものについては適宜参照したが、引用においてはドイツ語文献を和訳した。

Albert Schweitzer, *Aus Meinem Leben und Denken* (Leipzig 1931, Ungekürzte Ausgabe 1959, Bei Richard Meiner in Hamburg). (白水社シュヴァイツァー著作集第2巻)【LD】

Albert Schweitzer, *Die Idee des Reiches Gottes im Verlaufe der Umbildung des eschatologischen Glaubens in den uneschatologischen*, Gesammelte Werke in Fünf Bänden Band 2, 1974, Verlag C.H.Beck, München. (白水社シュヴァイツァー著作集第8巻)【IR】

Albert Schweitzer, *Die Mystik des Apostels Pauls*, Gesammelte Werke in Fünf Bänden Band 2, 1974, C.H.Beck, München. (白水社シュヴァイツァー著作集第10巻、第11巻)【MP】

Albert Schweitzer, *Kultur und Ethik*, München 1923, C.H.Beck, München, 10 Aufgabe 1953. (白水社シュヴァイツァー著作集第7巻)【KE】

Albert Schweitzer, *Kultur und Ethik in den Weltreligionen*, Verlag C.H.Beck, München, 2001. 【KEW】

² シュヴァイツァーは著作において後期ユダヤ教という名称を使用しているが、現在のユダヤ教研究においては後期ユダヤ教ではなく、初期ユダヤ教という術語が定着しているので、本論では初期ユダヤ教と記した。その点については以下の文献を参照。土岐健治『初期ユダヤ教の実像』新教出版社、2005年、土岐健治『初期ユダヤ教研究』新教出版社、2006年。

³ 終末論全般については以下を参照。芦名定道・小原克博『キリスト教と現代—終末思想の歴史的展開—』世界思想社、2001年参照。大木英夫『終末論』紀伊国屋書店、1971年参照。Alister E. McGrath, *Christian Theology an Introduction* (Blackwell, 1993), pp.465-477. シュヴァイツァーと神の国観については以下を参照。笠井恵二『シュヴァイツァーその生涯と思想』新教出版社、1998年参照。金子昭『シュヴァイツァーその倫理的・神秘主義の構造と展開』白馬社、1995年参照。Clemens Fry, *Albert Schweitzer Studien 4: Christliche Weltverantwortung bei Albert Schweitzer*, S204-217.

代の聖書学の歴史的展開について簡単に概観しておこう⁴。歴史に登場した人物としてのイエス研究（福音書に基づく）は、18世紀の啓蒙主義時代に登場したとされる。その創始者としてH・S・ライマールスを挙げるができる。それ以後20世紀の初頭に至るまで、歴史的イエスの研究の時代が続いたのである。その研究史と展望を、シュヴァイツァーが『イエス伝研究史』に詳細に纏めている。しかし、福音書の記述に基づいて歴史的イエスを描くことができるとの確信が20世紀の初頭に登場した様式史研究によって覆されたのである。様式史研究によれば、福音書に基づく歴史的イエスを描くことは原理的に不可能であるとされる⁵。その代表者であるブルトマンは、歴史的イエスと、原始キリスト教会の復活信仰及び宣教に現臨するキリストを区別し、彼は後者を重視したとされる。しかし、ブルトマンの弟子（E・ケーゼマン、G・ボルンカム、J・M・ロビンソン）は、上記のブルトマンの立場に対して疑義を唱えた。というのも、歴史的イエスの言動と原始キリスト教会の宣教の言葉（ケーリュグマ）に何らの連関がないのであればキリスト教信仰にとって大きな問題となるからである。そこから史的イエス論争（歴史に登場したイエスと宣教のキリストとの関係性の問題）が始まるのであるが、その後、1970年代のドイツ語圏においてイエス研究の新しい動向が生じたとされる。一例を挙げるならば、G・タイセンが提唱した文学社会学的研究である。タイセンは、歴史的イエスと最古の原始教会の運動を、同時代のパレスチナのユダヤ社会全体の枠組みの中に置き、それを社会学的に分析したとされる。さらに、1980年代に、R・ファンク主催の「イエス・セミナー」が開催され、啓蒙主義時代からシュヴァイツァーに至るまでの歴史的イエス研究を「第一の探究」、「史的イエス論争」以降1970年代までのイエス研究を「第二の探究」とした上で、自らの立場を「第三の探究」と称する。「イエス・セミナー」のメンバーのM・J・ボークは「第三の探究」の特性を3点指摘している。すなわち、①イエスの中心的使信を終末論に見ない点。②イエスを「知

⁴ 上記の欧米における聖書学研究の全体像については、大貫隆『イエスという経験』岩波書店、2014年、1-23頁参照。また、ロマーン・ハイリゲンタール（野村美紀子訳）『誤解されたイエス』教文館、1998年参照。

⁵ その点について大貫は以下のように指摘している。「まず、四つの福音書がそれぞれ提供しているイエスの生涯の時間的および空間的枠組みが問題となった。それまでのイエス伝研究はそこに史実性を認めていた。ところが、それはそれぞれの福音書記者が手に入れた個々の記事（伝承）が史実とは全く別の神学的関心から繋ぎあわされた（編集された）結果に過ぎない。このことをK・L・シュミット『イエス物語の枠』（1919年）が論証したのである。シュミットのこの研究は実に地味な研究であるが、やがて様式史的研究に続いて開発された編集史的研究方法を先取りする画期的なものであった」。大貫隆『イエスという経験』岩波書店、2014年、9頁。

恵の教師」として描く点。③イエス時代のパレスチナ社会の社会史的解明に重点が置かれ、多様な分析モデルが応用される点、である。とりわけ「第三の探究」に属するとされる研究者は、シュヴァイツァーが提起したイエスについての終末論的解釈とは別の視点で、イエスの言動を解釈する傾向を有するとされる⁶。すなわち、以前のイエス研究においては、シュヴァイツァーを批判するものを含めて、イエスについての終末論的解釈が前提されていたのであるが、イエスの言動に関する終末論的解釈について合意がない点に「第三の探究」の特徴が存するのである。このような傾向に対して大貫隆は批判的に検討している⁷。その点を鑑みるならば、シュヴァイツァーの聖書学研究に基づくイエスの終末論的解釈が必ずしも否定されたわけではないことを理解しうるのである—もちろん現代の聖書学研究に照らしてシュヴァイツァーの見解を批判的に分析することが重要であることは言うまでもないことであるが。

上記の点をふまえて、シュヴァイツァーの議論を見てみよう。彼によると、イエスの宣教によって「神の国がまもなく到来すると原始キリスト教徒は希望した」とされる⁸。原始キリスト教における信仰者が、神の国の切迫した到来を期待して生を営んでいた時期においては、神の国の到来が間近であるので、将来と現在が一体化し、いわば、「神の国は現在にまで突入していた」⁹のである¹⁰。しかし、現実世界において、神の国が顕な形において到来しなかったことによって、神の国の遅延の問題が生じたとされる。この終末の遅延の問題は、パウロ存命の際には早くも生じ、以下のように解釈されたことをシュヴァイツァーは指摘する¹¹。

⁶ 「第三の探究」に属するとされるバートン・L・マックは、シュヴァイツァーの『イエス伝研究』を詳細に紹介しつつ、Q資料とイエス像について分析している。バートン・L・マック（秦剛平訳）『失われた福音書』青土社、2005年参照。また、ドミニク・クロッサンも自身の見解を論ずる際にシュヴァイツァーについて言及している。ドミニク・クロッサン（太田修司訳）『イエス あるユダヤ人貧農の革命的生涯』新教出版社、1998年参照。

⁷ 「第三の探究」の立場の研究者の幾人に対して大貫は以下のように批判する。「とりわけマックやクロッサンのように、イエスの使信を強く非終末論化しようとする解釈の場合、そのようなイエスの生活と使信の全体を支えた動機づけのプロセスをうまく解明できなくなる。このことは、クロッサンがイエスの遍歴生活の『意図』への問いを立てながら、最後は犬儒派との外見的類似性の指摘で終わっていることに、端的に明らかである」。大貫隆『イエスという経験』岩波書店、2014年、15頁。

⁸ 【IR】S.341.

⁹ 【IR】S.343.

¹⁰ 神の国は単に受動的に到来するのではなく、神の国への待望において、それと相関して悔い改め（メタノイア）が生じるとされる。その意味において神の国の到来への、ある種の能動的な関与も人間に存しているのである。

¹¹ 「神の国」における、「国」のギリシア語は「バシレイア」であるが、「バシレイア」は支配

「神の国は、イエスの死と復活とともに事実上到来し、すでに現存しているのであるが、ただ、それ（神の国）がいまだ眼に見えるものになっていないだけである」¹²。

パウロは、イエスの黙示文学的の神の国観に加えて神の国の現在性—当然パウロも神の国の将来の完成・成就の観念を保持していたのではあるが—を強調する¹³。

シュヴァイツァーの『使徒パウロの神秘主義』(*Die Mystik des Apostels Paulus*)によれば、パウロは、キリストの死と復活を根拠に、この現実世界が神の国へと変貌していると考え、いわば、現実世界と神の国が相互に浸透しているとされる。ただし、このようなパウロ的な神の国の現在性の主張も、全体の趨勢としては、信仰者において、神の国が生じることへの確信に動揺を来たさざるをえなかったのである¹⁴。

と同時に支配領域をも意味するのである。領域的視点を重視するならば「神の国」、支配そのものを重視するならば「神の支配」と訳すことが可能である。その点については以下を参照。芦名定道・小原克博『キリスト教と現代—終末思想の歴史的展開—』世界思想社、2001年参照。

¹² 【IR】 S.342.

¹³ シュヴァイツァーは、以下のように、パウロとイエスの神の国観に類似点があることを指摘する。「その論拠は、イエス自身も、神の国は、みずからの死の結果として生ずる復活において、ただちに現れ始めるであろうと展望していたと言う点である」。【IR】 S.342.

¹⁴ その点について、シュヴァイツァーは以下のように指摘する。「神の国の間近な期待が、時の推移につれて、はるかな未来にとって代わられたと言うことは、神の国が信仰に対して持つ意義に影響する。神の国は信仰にとって、もはや以前と同じものではありえない。間近に期待された頃には、神の国は信仰の中心を占めていた。神の国は信仰を支配し、信仰の生命であった。いまや、それは背後に退いた」【IR】 S.343.

ここで指摘すべきことは、シュヴァイツァーは、終末論的思惟を媒介して、イエスの倫理を、パウロのキリスト神秘主義と関連せしめていることである。そこにおける問題点を付言するならば、キリスト教思想における①神の国の敬虔性と②救済（贖罪）の敬虔性の対立である—イエス伝研究史においても類似の視点を見ることができ—。つまり、シュヴァイツァーによれば、①は、いわゆる自由主義神学に該当し、罪の問題（罪からの救済）をあまり重視しない立場であり、他者（社会）に対する実践的献身を重視するキリスト教の立場であるとされる。シュヴァイツァーは、その弱点について以下のように指摘している。

「近代的な神の国の敬虔性は、以下のような弱点を有している。それは、神の国の信仰において、生き生きとしたキリストによる救済という表象を形成しえないことである・・・近代的な神の国への信仰は、その信仰の内に、キリストによる救済の個人的体験に権利を与えないので不完全なキリスト教である」。【MP】 S.492.

「我々の神の国の敬虔性は、パウロの神の国の敬虔性において、自らを変革しなければならない。我々は近代人として、我々の神の国の信仰を、神の国のプロパガンダと神の国の外面的仕事に限定することにとどめるという危険の内に存する。それは、どんな人でも、つまり、自分の内に神の国を担っていない人でも、神の国の実現のために何かすることができるようなものとしてあるかのごとくである。そうであるから、我々が、どんな善き意図を持っていても、絶えず、外面化された神の国の信仰が与えられるという危険が存するのである」。【MP】 S.500.

それに対して、②は、いわゆる正統主義神学に該当し、信仰義認による罪からの救済を重視する立場であり、他者（社会）に対する実践的献身をあまり重視しない立場であるとされる。その弱点についてシュヴァイツァーは以下のように言う。

「原始キリスト教以降の、あらゆる救済論の大きな弱点は、この救済論がただ自己自身の救済に従事せしめ、それと同時に、神の国の到来ということに心を向けさせるということがなかつ

ここで神の国の内実について言及しておこう。シュヴァイツァーが論ずる神の国とは「無常さや悪に支配されない世界」¹⁵である。このような神の国への憧憬的待望は、恵みによる悔い改め（過去の悪に対する反省的自覚と同時に将来に向けての倫理的刷新）と相関し、悔い改めによって、エゴイズム的な自己から脱却する証しとしての内発的な献身の倫理が生じ、信仰者は悪に満ちた現実世界から解放されうるのである—もちろん、悔い改めと神の国の出現の間には因果関係は存しないが—。

ただし、上述したように、終末の遅延の問題が顕在化することで、悔い改めと連動した人間の内発的な他者献身とは無関係に、神の国が受動的に到来するとされ、人間の努力をも伴う現実世界に対する能動的な改善が必要なきものとされたのである。このように、信仰者が、神の国の切迫した到来への期待を喪失し、神の国の到来が、無限の未来の出来事とされたことによって、「神の国の理念が信仰の背後」に退くことを、シュヴァイツァーは指摘する¹⁶。神の国が間近に期待されていた時には、現実世界は、神の国

たということである」。【MP】 S.494.

「パウロは、キリストによって、この世界から救済された人々に対して、この世界から脱出させるのではなく、この世界の中に入り、この世界の中で、神の国においてあることの力を彼らが証しするのである。パウロの徹底した事象性は、すべて極端な行き過ぎからパウロを守っている。もともと、キリストと共に死んで復活するという思想は、神の国への信仰に根差すのであるから、神の国への信仰の内に含まれる世界否定は禁欲や世界からの隠遁にまで押しやるものではない。それゆえ、この宗教的な倫理、それに加えて、この世界の終りを待望する世界観における倫理は、・・・健全で自然なものにとどまっている」。【MP】 S.499-500.

要するに、大枠で言えば、①を倫理の立場（他者ないし社会への献身を重視する立場）、②を信仰の立場（自己の内面的完成を重視する立場）と考えることができるが、シュヴァイツァーは、①の立場も、②の立場も各々単独では存しえず、②における罪からの救済が、①における内発的な実践的な他者献身の倫理へと接続されねばならないと考えているのである。この①と②を媒介するものこそが、イエスの倫理とも連関するパウロのキリスト神秘主義であり、キリストとの交わり（信仰者がキリストと共に死に共に復活すること）によって、自己の罪の救済（罪の許し）と、他の生への献身的倫理を媒介するのである。その点について彼は以下のように指摘する。

「キリストとの交わりにおいて救済されているという体験を『神の国にある』ことを示す聖霊（Geist）の証を、行為（Tat）にまで至らしめるのである」。【MP】 S.500.

シュヴァイツァーの立場は、自由主義神学の立場であると評されることが多いが、上述の視点を鑑みるならば、彼の立場を、単純に自由主義神学であるとは言えないと思われる。ここでは指摘するにとどめたいが、このキリスト神秘主義による①と②の媒介の議論は、自己の罪責の反省的自覚の内実である、自己自身に対する「誠実性」の努力（自己の内面的完成の中心的要素）と、内発的な他の生の肯定（他の生への献身的倫理）の関係性についてのシュヴァイツァーの哲学的考察と、構造的に類似していると思われる。その点については、拙論、岩井謙太郎、「シュヴァイツァーにおける幸福と倫理の諸問題」、『宗教と倫理』第14号、宗教倫理学会、2014年参照。

¹⁵ 【IR】 S.343.

¹⁶ シュヴァイツァーは、神の国（悪に支配されない世界）と現実世界（悪に満ちた世界）との対比における終末論的視座によって、人間の世界に対する関係性への態度が生ずることを強調

の理念に鑑みて、批判ないし否定されるものの、神の国が、間近に到来することが確信されているので、神の国と現実世界がある意味において一体化していると言っている。その点において、現実世界を全面的に否定することに対しては消極的であると言えよう。しかし、終末の到来が無限に遅延することによって、現実世界の否定が永続化されざるを得ないとされる。シュヴァイツァーは、神の国の無限の遅延の問題（終末の無限の遅延の問題）によって、古代・中世におけるヨーロッパにおける現世の否定的傾向が生じたこと—現実社会を改革しうる実践的献身的態度が生じえない—を考察するのである。

第二章 近代世界における神の国観

一章で検討したように、古代・中世ヨーロッパにおいては終末の遅延の問題と連関して現世否定（世界否定）の傾向が強かったが、近代ヨーロッパにおいては現世否定から現世肯定（世界肯定）の態度が有力になったことを、シュヴァイツァーは指摘する。シュヴァイツァーが考察する、終末論的思惟を媒介した現世否定から現世肯定への転換の問題は、現代における終末観（神の国観）を考える際にも重要である。というのも、ある意味において私たちは広義の近代の遺産を受け継いでいるからである。そこで、終末論的思惟において、現世否定がどのようにして現世肯定へと転換したのかについて考察してみよう。

シュヴァイツァーによれば、世界に対する肯定的な態度（人間に対する肯定的な態度）が生じた主要な要因は、コペルニクス、ケプラー、ガリレイ等の天文学の研究によって「宇宙を支配している法則性と秩序を認識した」¹⁷ ことによるとされる。その点について『文化と倫理』においても以下のように彼は指摘する。

「研究者として、彼らは宇宙の無限と秘密に侵入した。そして宇宙には合法則的な力が支配し、人間はそれを駆使する力の所有者であることを知った」¹⁸。

つまり、自然的世界（宇宙）には数式等で示しうる普遍妥当な合理的な法則が存し、それを人間が発見することによって、技術による自然支配を可能にしたのである（物質文化の恩恵の増大）。自然支配の技術を可能にした「知識と能力」の展開によって、世

している。

¹⁷ 【IR】 S.363.

¹⁸ 【KE】 S.57.

界に対して能動的に関与することへの自信が生じ、積極的な世界の肯定（生の肯定）へと導いたとされる。

「知識と能力の成果に基づいて、生と世界の肯定を強め、活気づける進歩信仰が生じた。あらゆる領域で、人間精神はこれまで知られなかったような能力と創造力における信頼が、あの時代を襲ったのである」¹⁹。

自然的世界（宇宙）に、普遍妥当的な合法則性が存しうることを発見したことによって、それに伴い、社会の状態も改善可能であるという確信が生じ、その実現のために新たな倫理が必要であるとの認識が深まったとされる。その際、古代の後期ストア派（セネカ、エピクテトス、マルクス・アウレリウス）の倫理が重要であると看做され、とりわけ、近世のグロティウスにおいて、後期ストア派のヒューマニズム（Humanität）の倫理思想が、先の世界肯定と結びつくことで、倫理的世界肯定が生じたことを、シュヴァイツァーは指摘する。また、興味深いことに、いわゆる西欧の世俗社会において、世界肯定が、倫理と結びつくことで、キリスト教の側でも、世界肯定の態度を受容することが可能になったことを、シュヴァイツァーは強調する²⁰。

そこで、シュヴァイツァーが解釈するキリスト教の倫理（イエスの倫理）について見ておこう。先述したように、神の国は「無常性や悪に支配されない世界」であり、この神の国の視点から、現実世界（悪に満ちた世界）を見るときに、終末論的世界否定（終末論的生否定）が生じるとされる。確かに、純粹に首尾一貫した世界否定の立場に固執するならば世界に対する無為を正当化せざるをえないが—シュヴァイツァーが解釈するインダ的思惟の立場—イエスの倫理は、純粹な世界否定とは異なり、世界に対する無為の立場を承認せず、他者に対する内発的な献身的行為を要求することをシュヴァイツァーは指摘している。

¹⁹ 【IR】 S.363-364.

²⁰ その点について、シュヴァイツァーは以下のように指摘する。「後期ストア派のヒューマニズムの倫理の発見は、近代にとって、自然の発見に並ぶものであった。近代の倫理は、この倫理を真のキリスト教倫理と同一視し、それを、イエスをアリストテレスによって解釈したスコラの倫理と対立させた」。【KE】 S.60-61. ここでは、シュヴァイツァーが解釈する後期ストア派の倫理思想の詳細について述べることはできないが、シュヴァイツァーによれば、後期ストア派の倫理と、キリスト教の倫理は古代においては共通点も有していたが、前者が、世界肯定（生肯定）の傾向が強かったのに対し、後者は、世界否定（生否定）の傾向を有していたために、近代以前においては、後期ストア派の倫理とキリスト教の倫理は相互に連関を持ちえなかったとされる。

「イエスの倫理は、行為的愛において隣人に対して外的態度に現れることを要求する」²¹。

イエスは現実世界に対しては否定的であったが、間近に到来する神の国（衰亡や悪に支配されない世界）の到来を確信していたので、神の国を先取りする意味において一神の国の理念に対する憧憬を原動力にして一現実世界における他者への内発的な献身の倫理を説くことができたのである。近代においては、後期ストア派のヒューマニズムの思想が、イエスの献身の倫理（キリスト教倫理）と重なり合うことで、キリスト教においては、古代・中世の世界否定（生否定）の世界観から、倫理的な世界肯定（倫理的な生肯定）の世界観へと転換することが可能になったとされる²²。シュヴァイツァーの終末論的解釈の枠組みで、この事態を再構成するならば、終末論的な神の国の待望（世界・生肯定と世界・生否定の緊張関係）を経て、神の国の遅延の問題（世界否定・生否定）が生じ、近代西欧において倫理的な世界・生の肯定へと到達した、キリスト教的終末論的精神史を確認することができるのである²³。

それでは、西欧近代において、キリスト教的終末論における神の国はどのように変遷したとシュヴァイツァーは考えているのであろうか。彼によれば、西欧近代社会においては、神の国の到来を、黙示文学的終末論的に思惟するのではなく、神の国は人間の能動的な努力によって、いわば非終末論的に現実世界に登場するとされるのである²⁴。

換言するならば、倫理的な世界肯定・生肯定の世界観の影響を受けた、近代のキリスト教徒にとって、神の国は、信仰者の倫理的努力によって能動的に構築されるものとみ

²¹ 【IR】 S.364.

同様のことを、シュヴァイツァーは『文化と倫理』においても指摘している。「世界終末と超自然的な神の国の到来の期待によって規定されたイエスの倫理と、彼の倫理的感覚の直接性が、その自然的世界に対する悲観論的態度にもかかわらず、隣人への行為的献身の倫理に至るというのは当然なことである。この行為的倫理がキリスト教的・悲観論的世界観からキリスト教的・楽観論的世界観への展開点となった」。【KE】 S.61.

²² その点について、シュヴァイツァーは以下のように指摘している。「イエスの愛の倫理と倫理的な世界・生肯定が後期ストア派から引き継いだ倫理（Humanitäts）とは、相互に調和していた」。【IR】 S.365.

²³ シュヴァイツァーが以下に遺稿において指摘しているように、イエスの世界観と、上述のキリスト教精神史は相互に関連していると思われる。「イエスの世界観の謎は、それが楽観論的でもなく悲観論的なものでもなく、楽観論的なものと悲観論的な特性が独特な緊張関係を示している」。【KE】 S.145.

²⁴ その点について、シュヴァイツァーは、以下のように指摘する。「この近代プロテスタントにおいて、神の国への信仰は、新たな種類の生命に目覚めたのである。近代のプロテスタントにとって、神の国は、終末論的宇宙的なものから将来おのずから到来するといったものではなくなり、人間がその実現すべき、非終末論的な精神的・倫理的なものとなったからである」。【IR】 S.365-366.

なされるようになったのである（罪責の問題を等閑視した）。近代のキリスト教徒が一般的にこのような考えに至ったのは、彼らが、イエスの思惟と行為を、黙示文学的終末論的枠組みで思索することを放棄し、この現実世界に神の国を構築するためにイエスが到来したと看做すに至ったからであると、シュヴァイツァーは解釈するのである（史的イエスの探求の重視）²⁵。

「イエスは、神の国を、この世界に築き、人々が、その実現に協力するよう呼びかけるために、この世界に到来したのだと、福音書の報告を理解する」²⁶。

このように近代西欧において、黙示文学的終末論的な神の国の思想から、非終末論的な神の国の思想への転換を、すなわち、受動的に到来する神の国観から、現実世界を改善することで、地上に神の国を能動的に構築する道へと至ったこと（能動的に構築する神の国観）を、シュヴァイツァーは指摘する。この理解の背景には、教義的なイエス像（いわゆる正統主義的神学）から、人間としてのイエス像（いわゆる自由主義的神学）の重視という転換が存するのであるが、彼によれば自由主義神学の前提（道德の教師としてのイエス像）は近代人が自らの生の願望を投影したイエス像であり、当時の聖書学的研究においては学問的に間違っているとされる。その点について、シュヴァイツァーは『イエス小伝』（*Eine Skizze des Lebens Jesus*）、『イエス伝研究史』（*Geschichte der Leben-Jesu-Forschung*）において、歴史学的・文献学的研究から、イエスが終末論の枠組みにおいて思惟し、かつ行為したことを検証するのである。

「イエスは終末論的に思惟しただけではなく、彼の行為においても終末論的な諸観念によって規定されていたということを示した」²⁷。

シュヴァイツァーが解釈するイエス像は、初期ユダヤ教の黙示文学的終末論に規定された、すなわち、その時代の人間と共に共有していた、終末論的世界観の表象素材をもとに思惟し行為したイエス像なのである（イエスの時代制約性の重視）。

ただし、先述したように、シュヴァイツァーは、イエスが単に受動的に神の国への到

²⁵ ここで指摘しておくべきことは、シュヴァイツァーが近代西欧におけるキリスト教精神史（神の国を巡る信仰）を、単にキリスト教的視点からのみ叙述しているのではなく、先述した、宇宙における客観的な自然法則の発見による世界と生の肯定—この発見においてはキリスト教的人間観が関係しているが—及び後期ストア派の倫理思想の導入による、倫理的な世界と生の肯定という、いわば世俗的世界の立場との連関において、キリスト教精神史を考察しているということである。つまり、シュヴァイツァーは、神の国の問題を、世俗的観点とキリスト教的観点とのいわば二重性において検討しているのである。

²⁶ 【IR】 S.366.

²⁷ 【IR】 S.369.

来を待望しただけであるとは考えていない。神の国の到来を待望するために「悔い改め」(Busse)を強調する。「悔い改め」というドイツ語においては、過去に犯された罪(過去の悪)を自覚的に反省することであると考えられているが、共観福音書における「悔い改め」(メタノイア)は、それだけに留まらず、将来的な新しい倫理的な生活に重点を置くものとされる。

「『神の国の待望における悔い改め』ということには積極的な倫理的な要求が含まれている」²⁸。

シュヴァイツァーの史的イエス像には、黙示文学的終末論的要素(ダニエル書)だけでなく、倫理的要素(アモス・ホセア等の預言者の倫理をイエスは共有する)が密接に関連しているとされる。

「イエスの神の国の表象は、後期ユダヤ教の終末論に属するものである。イエスは神の国の表象を精神化したのではなく、むしろ神の国の理念を、力強く深い愛の倫理に作り変えたということ、承認せざるをえないのである」²⁹。

このような視座から、シュヴァイツァーは自身の倫理の構築において、黙示文学的終末論的要素を文字通りに受容することを批判する。

「イエスが、神の国と神の国のすみやかな到来の表象を抱き、神の国が実現されないままであり、かつ、私たちがその表象を受容しえないということを承認しない試みは、誠実さに反することを意味する」³⁰。

何故、現代において黙示文学的終末論的要素を、文字通りに受容できないのであろうか³¹。シュヴァイツァーはその点について顕に述べていない。そこで、現代の論者が論じる、黙示文学的終末論の長所と短所について見ておくこととする³²。まず、黙示文学的終末論的要素の短所についてであるが、以下に、2点記しておく。すなわち、①黙示文学的終末論が「世界最終戦争」を想定しているため、それが文字通りに読解されるならば、戦争や暴力という悪が肯定されかねない点。②「選ばれた残りの者」という選民

²⁸ Albert Schweitzer, *Das Messianitäts und Leidensgeheimnis. Eine Skizze des Lebens Jesu*, Verlag von J.C.B.Mohr(Paul Siebeck).1901,S.18.

²⁹ 【IR】 S.371.

³⁰ 【IR】 S.372.

³¹ 黙示論的終末論の意義については、芦名定道、「現代キリスト教思想における終末論の可能性」、『基督教学研究』第18号、京都大学基督教学会、1998年参照。小原克博、「生態学的終末論の基礎づけ」、『基督教学研究』第60号、1999年参照。

³² この問題については以下の文献を参照。大貫隆『終わりから今を生きる 姿勢としての終末論』教文館、1999年参照。

思想によって、反ユダヤ主義的イデオロギーが生じうる点等である。このような指摘を鑑みるならば、シュヴァイツァーが、イエスの黙示文学的終末論の否定的要素について言及していることは妥当性を有すると思われる。次に黙示文学的終末論の長所について2点示しておこう。すなわち、①「最後の審判」という神話論的表象によって、神の前において個人の責任性を喚起する点、②宇宙論的な射程を有することにおいて、現代のエコロジカルな問題に対応することができる点である。

これらの点から読み取りうることは、シュヴァイツァーが、黙示文学的終末論の短所を排し、その長所を生かしつつ、自身の終末論的思惟を展開しているということである。その点を詳細に検討するために、三章では遺稿『世界の諸宗教における文化と倫理』においてシュヴァイツァーが考察するイエスの倫理の特性について見てみよう。

三章 遺稿におけるイエスの倫理と「生への畏敬」の思想の関係性

シュヴァイツァーは遺稿『世界の諸宗教における文化と倫理』において—先述した『神の国の理念』におけるキリスト教精神史と重なる部分もあるが—主として、キリスト教倫理を他の諸宗教の倫理と関係づけて考察している。ただし、そこにおいても、シュヴァイツァーは、黙示文学的終末論的に神の国を待望したイエスの倫理に多大な関心を寄せているのである³³。とりわけ、遺稿において、文化哲学等の既刊著作では十分展開されていなかったイエスの倫理が考察されている。ここで、キリスト教倫理の中で特にイエスの倫理を論じる理由は、先述したように、シュヴァイツァーが自身の聖書学的研究の出発点において—『イエス小伝』、『イエス伝研究史』—イエスの生涯が首尾一貫して終末論に規定されていたことを論じ、それを基に、イエスの倫理とも連関しうるイエス神秘主義について考察しているからである³⁴。また、シュヴァイツァーが『私の生涯

³³ 遺稿においても、シュヴァイツァーはイエスの黙示文学的終末論的要素と倫理的要素の関係について、以下のように指摘している。「イエスの倫理は、力強く生き生きと人間の人間に対する態度の問題を扱う限りにおいて活動的な倫理である」「イエスは、世界の完成を自然的な世界の黙示文学的否定において思惟した」。【KEW】S.145.

³⁴ (注)10で指摘したように、シュヴァイツァーは『使徒パウロの神秘主義』(Die Mystik des Apostels Paulus)において、キリスト神秘主義(生への畏敬の倫理と連関した)を論じており、シュヴァイツァーが解釈するパウロの思想も見逃すことはできないが、シュヴァイツァーがキリスト教の原点(起点)にイエスを据えていると解釈しうるので、ここでは、イエスの倫理について考察する。クラウゼン(Carsten Claussen)は、シュヴァイツァーが『使徒パウロの神秘主義』の最初の草稿を1906年に提示するものの、様々事情の下、『使徒パウロの神秘主義』の出版が長らく公刊されなかった旨を述べている。このことから、シュヴァイツァーが早くからパウロの思想に関心を持っていたことを理解しうるのである。

と思惟』で、イエスの倫理と、「生への畏敬」の倫理が密接に関連していることを以下のように指摘している点も重要である。

「『生への畏敬』の倫理は、普遍的に拡大された愛の倫理である。生の畏敬の倫理は思惟必然的なものとして認識されたイエスの倫理である」³⁵。

上記の諸点から、聖書学的研究に基づいて考察されたイエスの倫理と、哲学的な「生への畏敬」の倫理がシュヴァイツァーにおいて強く結びついていることが予想される。そこで、2-2-3では、先述した、黙示文学的終末論の長所、すなわち、①神の前において個人の責任性を喚起する点、②宇宙論的な射程を有することにおいて、現代のエコロジカルな問題に対応することができる点が、シュヴァイツァーが解釈するイエスの倫理において包含されていることを検討し、イエスの倫理と「生への畏敬」の倫理が密接に関連していることを考察する。

シュヴァイツァーによれば、イエスの倫理には、以下の三つの要素が相互に関連しているとされる。

- ① 倫理的な人格性の完成の倫理：この倫理的な人格性の完成の倫理は、専ら秩序ある社会制度を構築することを目的とする倫理とは異なっている—無論、社会制度を構築することをイエスが否定しているわけではないが—。あくまでも、この倫理は第一義的に「人間の内面的な、せざるをえないという意識」³⁶、すなわち、自己の内面において自発的に湧き上がる、やむにやまれぬに要求によって規定される倫理である。この倫理は悔い改めの倫理と関連し、ここに個人的責任の喚起をみることができる。
- ② 「倫理の根本原理は『世界とは異なっていること』、すなわち、自然的な自己主張ではなく自ら献身を行うこと」³⁷。

ここで指摘すべきことは、『世界とは異なっていること』という倫理的原理は、イエスの黙示文学的な世界終末の待望と密接に関連しているということである。

「倫理の根本原理において、『世界とは異なっている』という命題は一つの認識を保

Carsten Claussen, *Albert Schweitzers Understanding of Righteousness by Faith according to Pauls Letter to the Lomans*, (Edited by Daniel Patte and Cristina Grenholm: Modern Interpretations of Romans Tracking Their Hermeneutical/Theological Trajectory, pp.89-90), Bloomsbury, 2013.

³⁵ 【LD】 S.193.

³⁶ 【KEW】 S.144.

³⁷ 【KEW】 S.144.

持っている。その認識は世界終末の期待から生まれたのである」³⁸。

『世界とは異なっている』という倫理的原理の内実とはいかなるものであろうか。ここで思い起こすべきことは、黙示文学的に表象された神の国は「衰亡や悪に支配されない世界」であり、現実世界は「悪に満ちた世界」であることを、シュヴァイツァーが指摘していることである。彼は『世界とは異なっている』という視点を『神の国』に、『世界』を『悪に満ちた現実世界』に重ね合わせて考察するのである。それでは現実世界の悪的状况とはいかなるものであろうか。シュヴァイツァーはその点について以下のように指摘する。

「世界において生じる出来事の法則は、ある存在者が他の存在者に対してエゴイズム的な仕方で対応し、力をもって他の存在者に対して押し通そうとすることを試みることである」³⁹。

すなわち、現実世界における悪の根本的な特性を、生命体間におけるエゴイズム的な関係性が『世界』にあまねく行き渡った事態であると、シュヴァイツァーは考えているのである。このようなエゴイズム的な関係性を基に、現実の生において悪が生ずるのであるが、それを克服するためには、悔い改めとも密接に関連した①倫理的人格性の完成の倫理を起点に、他の生が肯定され、ひいては、他の生への献身的態度（他の生に対する実践的な配慮）が生じることによって、悪なる現実世界を改善することが可能になると、シュヴァイツァーはイエスの倫理を考察するのである（非エゴイズム的な関係性の構築）⁴⁰。

³⁸ 【KEW】 S.145.

³⁹ 【KEW】 S.144.

⁴⁰ シュヴァイツァーは、他の生への献身的態度（他の生に対する実践的配慮）を、自己の罪責ないし悪の自覚から、その贖いとして自発的に他の生に実践的配慮をすることを重視する。彼のアフリカ植民地での実践的な医療活動等はその顕著な現れであると言えよう。シュヴァイツァーは、自己の罪責の反省的自覚の内実を、自己自身に対する「誠実性」への努力と称する。この「誠実性」への努力は、自己の生への志の歪みの認識と関連し、そのような悪（現実の自己）を克服するための努力を、シュヴァイツァーは内面的な完成と称する。そして、この「誠実性」への努力は、自己が世界（自己を含めた悪に満ちた現実）から内面的に自由になることの証でもあり、他の生の肯定を促し、ひいては、他の生への献身的行為へ導きうることをシュヴァイツァーは考察するのである。その点については、拙論、岩井謙太郎、「シュヴァイツァーにおける幸福と倫理の諸問題」、『宗教と倫理』第14号、宗教倫理学会、2014年参照。ここでは指摘するにとどめたいが、イエスの悔い改めの倫理が、自己自身に対する「誠実性」（自己の内的完成への要求）に重なり合い、生への畏敬が神の国（神の支配）と関連していると思われる。クレメンス・フレイ（Clemens Frey）も生への畏敬の実践とイエスの説く神の国が関連していることを以下のように指摘している。「ランパレネにおいてイエスの意志が現前している。疑いもなく、シュヴァイツァーは、神の国の思惟と彼の活動とが広範に一致していることを承

換言するならば、自然法則ともいうべくエゴイズム的な関係性をできる限り脱却し、この自然法則とは異なる、すなわち、エゴイズムを脱却しうる利他的関係性を生命間において構築しうる世界こそが、イエスの説く神の国（神の支配）であるとされる。このような事態こそが、『世界とは異なっていること』であり、その術語をシュヴァイツァーは黙示文学的終末論の表象から用いているのである。その意味において、彼はイエスの黙示文学的終末論—個人の責任性の喚起にも連なる—に基づく倫理を評価していると言えよう。

③「倫理の根本原理は、自己に限られること（*Selbstbegrenzung*）への衝動を全く有さない。倫理の根本原理は絶対的なものである」⁴¹。

シュヴァイツァーにとって絶対的なものとは倫理的献身の対象に限りがないこと（*Unbegrenzte*）であり、彼が、「倫理的なものは、非理性的なものの領域に拡張される」⁴²と指摘しているように、イエスの倫理において、人間以外の生命体においても倫理的配慮の対象範囲を拡張しうることを考察していると言えよう。ここに黙示文学的終末論の宇宙論的視座を見ることができるのである。

上述のように、シュヴァイツァーは、イエスの倫理の三つの特性を示しているが、それらをまとめるならば、イエスの倫理は、悔い改めとも連関する、自己の内発的自覚による他の生の肯定であり、それに連なる、他の生への献身的態度（他の生に対する実践的な配慮）である。そこにおいては、人間に対する献身だけでなく、それ以外の生命体への献身の可能性—献身の対象には限界がないという意味において絶対的である—をも有しているということである。そして、献身の対象に限界を設けえないイエスの倫理は、以下の「生への畏敬」の倫理の構想において示されるのである。

「倫理は、総じて、生き物に対する人間の態度の原理にならねばならない。人間の人間に対する態度、人間の社会に対する態度、社会の人間に対する態度は、倫理ではない。それは倫理の応用である」⁴³。

服する。生への畏敬の実践は神の国のための活動である。この神の国の普遍的性格は、あらゆる生命体に対する畏敬的な行為によって真剣に受けとめられた」*Albert-Schweitzer-Studien* 4, Clemens Frey, *Christliche Weltverantwortung bei Albert Schweitzer*, Verlag Paul Haupt, Bern und Stuttgart, 1993, S.210-211.

⁴¹ 【KEW】 S.144.

⁴² 【KEW】 S.144.

⁴³ 【KEW】 S.172.

「道徳的なものの根本原理の内実の定式化において展開する方向は、人間は単に彼の自然的な所属メンバーだけでなく、本来、あらゆる人間、否、一切の被造物との連帯関係に存するという何を何らかの仕方で表現にもたらさなければならないのである」⁴⁴。

ここで指摘すべきことは、シュヴァイツァーの「生への畏敬」の倫理の構想は、先述の③において検討したイエスの倫理における倫理的な配慮の対象の無限性を、シュヴァイツァーが現実化したと言うべきで、イエスの倫理においては顕になっていなかったが、そこにおいて潜在的に胚胎していたと思われる—黙示文学的終末論に含まれる宇宙論的要素の徹底化—。

イエスの倫理と密接に関連して構築された、シュヴァイツァーの「生への畏敬」の倫理における、個人の責任性の要素と宇宙論的要素の視点は、以下の二つの引用文においても示されている。

「人間は、世界とは異なったものであるということの原理の強要のもとにありつつ、それと同時に、人間が宇宙に共属していることを深く体験することに存するのである」⁴⁵。

すなわち、人間が宇宙に共属していることを体験することとは（宇宙論的要素）、自己の生が自己だけで孤立して存在しているのではなく、自己が他の生と連带的に関係していることを感得(共感・共同体験)することに存するのである。この体験こそが「生への畏敬」の神秘主義の主要な要素であるが、そこにおいて自己の生が真に肯定されうるのである。というのも、自己の生が他の生から孤立ないし闘争的に営まれる場合には、表面的な自己肯定のみが生じ—他の生を承認しないものは自己の生も自らによって承認されえない—真の自己肯定は生じえないと言えるからである。そして、逆説的にも、自己の生が真に肯定されることによって、自己の悪（罪責）への反省的思惟が生ずるのである。この自己の悪への思惟から、自己の内発的要求（悔い改めの倫理とも連関している倫理的な人格性の完成の倫理）が生じ、他の生が肯定され、そこを起点に、内発的な献身的行為（利他的行為）が生じうるとされる。

「私が世界とは異なっていることから生ずる、世界に対する私の態度は、私の内に存する生への畏敬によって規定されているのである」⁴⁶。

⁴⁴ 【KEW】 S.22.

⁴⁵ 【KEW】 S.168.

⁴⁶ 【KEW】 S.174.

ここに、シュヴァイツァーの「生への畏敬」の倫理における、個人の責任の自覚的要素が現れていると言えよう。

結びにかえて

以上の議論より、シュヴァイツァーの「生への畏敬」の倫理が、終末論的思惟と関連したイエスの倫理と密接に関連していることが明確になったと思われる。そして、この倫理において、黙示文学的終末論的のプラスの要素—個人の責任性を喚起すること（個人的要素）、エコロジー的要素（宇宙論的要素）を有すること—が存することを検討しえたと思われる⁴⁷。

ここで補足を加えるならば、これまでの議論を基に、シュヴァイツァーは、自身の終末観において、戦争における核兵器の問題から、人類の滅亡の危機における終末論的状況を看取り、それをどのように克服するかについて考察する。

「人類の滅亡がすでに始まりつつあることは、私たちの体験である。知識と能力の成果によって、人類に与えられた力のもとに、有益なことのために使用し、決して破壊のためには使用しないという力を人類が育成するかどうかにある」⁴⁸。

つまり、シュヴァイツァーは、近代において支配的となった科学技術の進歩—もちろん科学技術の恩恵によるプラスの要素は否定できないが—の行き過ぎによって人類が破滅の危機に瀕していることを、自身の終末論的思惟に基づいて強調するのである。シュヴァイツァーが生きた時代においては、東西冷戦を緩和しうる核兵器の廃絶の問題が大きな課題であったが、現在においては、グローバルな環境問題による人類の危機（生態系全体の危機）の克服が喫緊の課題となっている。環境問題の危機に取り組むためには、個人が、各々、被造物全体に対して倫理的責任を自覚する（実践的な献身の倫理へと至りうる）のと同時に、個人の生が、一人個人の生だけでなく、他の生命体と関連して生を営んでいるという連帯性の意識（他の生への共感・共体験）が必要不可欠である

⁴⁷ ただし、シュヴァイツァーが以下に主張するように「生への畏敬」の倫理は、キリスト教固有の倫理（特殊倫理）にとどまらず、それを超えた射程を有する倫理（一般倫理）であると言えよう。

「世界は、中国的東洋、インド的東洋、二元論的ユダヤ教、キリスト教に妥当する、世界観の根本形態へと定められていないのであろうか。・・・生きた水は、人類における倫理的思惟が現存する限り、世界の諸宗教に注がれる」。【KEW】S.175.

「人類の探求が向かう満足しうる世界観は、何らかの仕方で生への畏敬の世界観（Weltanschauung der Ehrfurcht vor dem Leben）となるであろう」。【KEW】S.172.

⁴⁸ 【IR】S.373.

う。その点において、シュヴァイツァーの「生への畏敬」の倫理を再考することは、現代においても有意義であると思われる⁴⁹。

キーワード: シュヴァイツァー、終末論、キリスト教、倫理、生への畏敬

Keywords: Schweitzer, Eschatology, Christianity, Ethik, Reverence for Life

⁴⁹ シュヴァイツァーが論ずる、終末論的思惟による倫理的問題の解決方法は、感性的要素（生への畏敬による共感）によるものが大きいと思われる—もちろん理性的要素も大切であるが—。この点については詳述することができないが、彼は以下のように、人類的倫理的課題（核兵器の廃絶の問題等）に対しては合理的思惟のみでは解決しえないと考えている。「破壊力にまだ限りがあった頃には、理性的な熟考に訴えて、災いを制限する希望が存在しうるかに思われた。・・・そのような幻想はもはや維持しがたい」。【IR】 S.373.